

# 言葉の力 － 幼保小の円滑な接続を視野に入れて－

上田保明・吉鶴修\*

**The power of words :  
With a view to smooth connections  
between kindergartens, preschools, and elementary schools**

Yasuaki UEDA・Osamu YOSHITSURU

## 1. はじめに

「ある会話を聞いて、涙した」、「あるテレビ広告を見て、あらためて自らの生き方を問うた」、「喫茶店のウェイトレスさんの言葉を聞いて、違和感を覚えた」などの経験がある。涙したり、あらためて自らの生き方を問うたり、違和感を覚えたりするのは、コミュニケーションの中での言葉に心が動いたからである。心が動くのは、コミュニケーションの中で、言語情報に内在している論理や構造を的確に捉える「論理的思考力」や相手の気持ちや作品の内容・表現などを感じ取ったり、感動したりできる「情緒力」、語彙や言語表現等の言語に関する自分の「国語の知識」などが、相互に影響し合いながら感情や思考に大きな影響を及ぼす力が働くからである。これが言葉の力である。

文化庁の令和3年度「国語に関する世論調査」の結果<sup>1)</sup>では、「Ⅳ 言葉遣いに対する印象や、慣用句等の認識と使用」の問いで、「気になる言葉（「なにげに」「ぶっちゃけ」等を使うことがあるか）」に対して、半数近い人が「使うことがある」と回答している。因みに、「なにげに」については、47.1%の人が「使うことがある」と回答している。この言葉は、広辞苑（第7版）では立項されているが、「何気ないの連用修飾の形として（中略）1980年代から誤って使われ始めた語形」と解説されている。つまり、正しくは「なにげに」ではなく、「何気なく」や「何気なしに」である。また、「ぶっちゃけ」については、41.1%、「半端ない」については、46.4%の人が「使うことがある」と回答している。これらの言葉は広辞苑（第7版）では立項されていない。このような時代に流行る言葉（敬語も含む）等については、「国語の知識」として言葉の力の基盤となるものであり、「論理的思考力」や「情緒力」が働くコミュニケーションの中での使用については的確で適正な判断が求められると考える。

これらの「論理的思考力」や「情緒力」、「国語の知識」等は、言葉を発する者にも受ける者にも必要な国語力であり、両者に備わってこそ質の高いコミュニケーションが成立すると考える。

そこで、本稿では国語力を構成するこれらの力を分析するとともに、国語教育の現状を踏まえた課題を明確にして、これからの時代に求められる国語力や国語力を身に付けるための方策について考察していきたい。

---

\* 前・山口大学教育学部附属幼稚園長・附属山口小学校長、現在、(一財) 教員養成評価機構評価員

## 2. 国語教育の現状と課題～何故、言葉の力なのか～

平成14年2月20日に文部科学大臣から文化審議会（以下、審議会と表す。）に対し、「これからの時代に求められる国語力について」が諮問され、文化審議会国語分科会において検討された。諮問においては、「まず国語の重要性について再確認し、その上で、これからの時代に求められる国語力とは何か、また、そのような国語力を身に付けるための方策などについて検討する」ことが求められた。そして、平成16年2月3日の審議会総会の決定を経て、文部科学大臣に答申された（文化審議会答申<sup>2)</sup>）。その答申の「第1 国語力を身に付けるための国語教育の在り方」の「1 国語教育についての基本的な認識」において、次のような指摘がなされている。

国語教育の在り方を考える場合の根本的な問題として、日本人の多くが言葉の力を信じていないという指摘がある。言葉によって物事が変わり、また、変えていくことができるという言葉への信頼を学校教育の中だけでなく、社会全体で教えていくことが大切である。このような言葉に対する信頼がないと、国語教育そのものが成立しにくくなるだけでなく、日本の社会そのものが危うくなるおそれもある。（下線筆者）

国語教育の現状でもあり、根本的な問題として「日本人の多くが言葉の力を信じていない」というショッキングな指摘がある。この指摘を国語教育の現状と課題として、「これからの時代に求められる国語力について」と「国語力を身に付けるための方策について」について意見を述べていきたい。

## 3. これからの時代に求められる国語力について

### 1) 国語力のとらえ方について

審議会答申では、「これからの時代に求められる国語力」を大きく二つの領域に分けてとらえている。一つは、考える力、感じる力、想像する力、表す力から成る、言語を中心とした情報を処理・操作する領域（①）であり、いま一つは考える力や、表す力などを支え、その基盤となる「国語の知識」や「教養・価値観・感性等」の領域（②）である。ただし、ここでの目的は、国語力一般の「全体像」を詳細に描くことではなく、あくまでも「これからの時代に求められる国語力」として、何が必要な能力なのかを明確にすることである。したがって、以下に示す二つの領域は、「これからの時代に求められる国語力」を構造的に表したものである。

①は国語力の中核であり、言語を中心とした情報を「処理・操作する能力」としての「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」の統合体として、とらえることができるものである。②は、「①の諸能力」の基盤となる国語の知識等の領域である。この二つの領域は、相互に影響し合いながら、各人の国語力を構成しており、生涯にわたって発展していくものと考えられる。なお、読書は、①の「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」のいずれにも関連しており、②の国語の知識等の領域とも密接に関連している。国語力を高める上で読書が極めて重要であることは、この点からも明らかである。

### 2) 国語力の中核を成す領域（①の領域）

この領域は、「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」の四つの力によって、構成されている。これらは、言語を中心とした情報を「処理・操作する能力」であり、国語力の中核と考えられるものである。また、この四つの力が具体的な言語活動として発現したものが、「聞く」「話す」「読む」「書く」という行為であると考えられる。日常生活の中で、この「聞く」「話す」「読む」「書く」という言語活動が様々な状況に応じて、複雑に組み合わせられて用いられている。

審議会答申では、「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」の四つの力を次のように述

べている。

「考える力」とは、分析力、論理構築力などを含む、論理的思考力である。「感じる力」とは、相手の気持ちや文学作品の内容・表現、自然や人間に関する事実などを感じ取ったり、感動したりできる情緒力である。言葉の使い方に対し、微妙な意味の違いや美醜などを感じ取る、いわゆる「言語感覚」もここに含まれる。「想像する力」とは、経験していない事柄や現実には存在していない事柄などをこうではないかと推し量り、頭の中でそのイメージを自由に思い描くことのできる力である。なお、物事を考え、感じ、想像することにより、言語を中心とする情報の内容を正確に理解できることから言えば、上記の「考える力」「感じる力」「想像する力」をまとめて、「理解する力」と位置付けることもできる。「表す力」とは、考え、感じ、想像したことを表すために必要な表現力であり、分析力や論理構築力を用いて組み立てた自分の考えや思いなどを具体的な発言や文章として、相手や場面に配慮しつつ展開していける能力である。

### 3) 「国語の知識」や「教養・価値観・感性等」の領域 (②の領域)

この領域は、「考える力、感じる力、想像する力、表す力」が働くときの基盤を成すものである。また、「考える力、感じる力、想像する力、表す力」に直結している「国語の知識」の部分と各人の「教養・価値観・感性等」の部分に分けることができる。

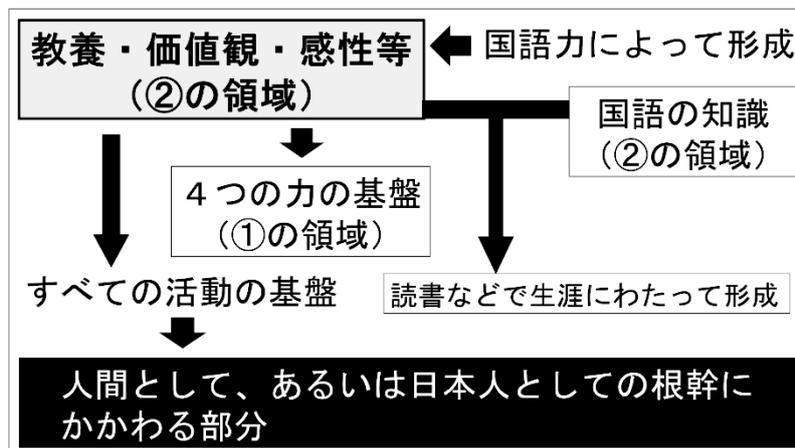


図1 【国語力における「教養・価値観・感性等 (②の領域)」の位置付け】(筆者作成)

ここでは、後者を国語力の構成要素に含めて考えているが、図1に示すように、もう少し正確に言えば、後者自体が主として国語力によって形成され、かつ、「考える力、感じる力、想像する力、表す力」の国語力の基盤の役割をも果たしているものである。さらに、後者はすべての活動の基盤となるものであり、その意味で、「人間として、あるいは日本人としての根幹にかかわる部分」でもある。

両者とも、基本的には読書などの方法を通じて生涯にわたって形成されていくものであるが、前者の「国語の知識」については学校教育の果たす役割が極めて大きい。

なお、「国語の知識」とは具体的には、以下の六つの例が示されている。

- (例) ① 語彙 (個人が身に付けている言葉の総体)  
② 表記に関する知識 (漢字や仮名遣い、句読点の使い方等)  
③ 文法に関する知識 (言葉の決まりや働き等)  
④ 内容構成に関する知識 (文章の組立て方等)  
⑤ 表現に関する知識 (言葉遣いや文体・修辭法等)  
⑥ その他の国語にかかわる知識 (ことわざや慣用句の意味等)

#### 4) 国語力と小学校学習指導要領・国語の目標との関係における考察

平成20年告示と平成29年告示の小学校学習指導要領国語編の目標を比較すること（表1）で、この度の改訂が国語教育としての国語力の育成を大切にすることが分かる（下線筆者）。平成20年の目標との違いについて下線部分を中心に、国語力との関わりで次のように解釈できる。

表1 【小学校学習指導要領国語編の目標に関する新旧比較対照表】

小学校学習指導要領国語編 (平成20年) <sup>3)</sup> 目標	小学校学習指導要領国語編 (平成29年) <sup>4)</sup> 目標
<p>国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を養う。</p>	<p>言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) <u>日常生活に必要な国語</u>について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。</p> <p>(2) <u>日常生活における人との関わり</u>の中で<u>伝え合う力</u>を高め、<u>思考力や想像力</u>を養う。</p> <p>(3) <u>言葉がもつよさ</u>を認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。</p>

「日常生活に必要な国語」や「日常生活における人との関わり」とあるように、日常生活を重要視していることが分かる。これは、言語活動を通じた言葉の力としての伝える力を大切にしていると言える。また、「伝え合う力」や「思考力」、「想像力」は、国語力の「表現力（表す力）」や「論理的思考力（考える力）」、「想像力（創造する力）」である。言葉の力の育成には重要な力である。「言葉がもつよさ」は、我が国の言語文化に関する学習を重視している。言語文化としての「国語の知識」を身に付けることは、言葉の力の重要な部分である。

このように、平成29年告示の小学校学習指導要領国語編の目標からも分かるように、国語力を重視して言葉の力を育てようとしていることが分かる。このことは、平成14年の文化審議会答申の「日本人の多くが言葉の力を信じていないという指摘」に対する取組であり同時に、PISA調査の読解力（以下、PISA型読解力と表記する。）を育成することとも関係する。

#### 5) PISA型読解力と国語力（論理的思考力）との関係における考察

OECD（経済協力開発機構）が行う世界的な学力調査である「OECD 生徒の学習到達度調査」（以下、PISA調査と表す）がある。2000年（H2）から3年ごとに行われ、2022年（R4）に行われた最新の調査で8回目である。2021年の調査は、新型コロナウイルス感染症の影響で2022年の調査となった。調査の目的は、義務教育を終える15歳までに学んだ知識や技能を実生活でどの程度活用できるかを測ることである。調査の結果を国別に比較することで、各国が自国の強みや弱みを知り、よりよい教育課程の編成に役立てている。日本の教育課程の基準となる学習指導要領等にも、PISA調査の結果から得られた知見が反映されている。

PISA調査は問題に対するテスト形式の調査と、アンケート形式で質問に答える質問紙調査の2つから成り立っている。テスト形式の調査は、「読解力」「科学的リテラシー」「数学的リテラシー」という3分野がある。2015年（H27）からは、コンピュータ上で出題と回答を行うCBTというやり方に変更した。日本では高校1年生が調査の対象で、全国からランダムに選ばれた学校の生徒約6,000人が受検する。

「読解リテラシー」に当たるPISA型読解力は、テキストから読み取った情報を自らの知識や経験に位置付け、実生活で直面する様々な課題においてどの程度活用できるかを調査する。このような力は、我が国が1998年（H10）の学習指導要領以来、学校教育上のキーワードとなっている「生きる力」と同じ方向性にあると考える。ところが、平成28年の中央教育審議会答申における小・中学校の国語科の成果と課題として、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説「国語編」で次のように指摘している<sup>5)</sup>。

PISA2012（平成24年実施）においては、読解力の平均得点が比較可能な調査回以降、最も高くなっているなどの成果が見られたが、PISA2015（平成27年実施）においては、読解力について、国際的には引き続き平均得点が高い上位グループに位置しているものの、前回調査と比較して平均得点が有意に低下していると分析がなされている。これは、調査の方式がコンピュータを用いたテスト（CBT）に全面移行する中で、子供たちが、紙ではないコンピュータ上の複数の画面から情報を取り出し、考察しながら解答することに慣れておらず、戸惑いがあったものと考えられるが、そうした影響に加えて、情報化の進展に伴い、特に子供にとって言葉を取り巻く環境が変化する中で、読解力に関して改善すべき課題が明らかとなったものと考えられる。（下線筆者）

そこで、「OECD生徒の学習到達度調査PISA2022のポイント」（文部科学省・国立教育政策研究所）<sup>6)</sup>を参考にして、2000年（H12）から我が国のPISA型読解力の推移を表2にまとめた。

前述の小学校学習指導要領（平成29年告示）解説「国語編」で指摘された「前回調査と比較して平均得点

表2 【我が国のPISA型読解力の推移】

実施年	読解力の順位／参加国数	備考
2000年・H12	8位／31カ国	
2003年・H15	14位／40カ国	順位が急落したことから「PISAショック」と言われた。 2004年（H16）：文化審議会答申がまとめられた。 2005年（H17）：臨時全国都道府県・指定都市教育委員会・指導主事会議→PISA型読解力の定義が示された。 2005年（H17）：「読解力向上プログラム」が示された。
2006年・H18	15位／57カ国	
2009年・H21	8位／65カ国	
2012年・H24	4位／65カ国	
2015年・H27	8位／70カ国	コンピュータ使用型の調査 2017年（H29）：新学習指導要領の告示
2018年・H30	15位／77カ国	2021年（R3）：山口市・GIGAスクール構想・一人1台端末の整備完了
2022年・R4	3位／81カ国	

我が国では一般的に読解力とは「文章を読んで理解する能力」のことを指すが、PISA型読解力とは「Reading Literacy」の訳で、我が国の国語教育で従来から用いられてきた読解や読解力という語の意味するところとは異なる。以下に示す2005年（H17）1月の臨時全国都道府県・指定都市教育委員会の指導主事会議の資料4－6「PISA（読解力）の結果分析と改善の方向（要旨）」<sup>7)</sup>から、文部科学省におけるPISA型読解力の定義等について知ることができる。その資料の一部から、定義を踏まえたPISA型読解力の育成と国語力の関係について考える。

#### 1 読解力の定義等

定義：自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力。

ねらい：義務教育終了段階にある生徒が、文章のような「連続型テキスト」及び図表のような「非連続型テキスト」を幅広く読み、これらを広く学校内外の様々な状況に関連付けて、組み立て、展開し、意味を理解することをどの程度行えるかをみる。

特徴 1 理解するだけではない。

→ テキストに書かれた情報を理解するだけではなく、「解釈」し、「熟考」することを含んでいる。

2 読むだけではない。

→ テキストを単に読むだけではなく、テキストを利用したり、テキストに基づいて自分の意見を論じたりすることが求められている。

3 内容だけではない。

→ 内容だけではなく、構造・形式や表現法も、評価すべき対象となる。

4 文章だけではない。

→ テキストには、文学的文章や説明的文章などの「連続型テキスト」だけでなく、図、グラフ、表などの「非連続型テキスト」を含んでいる。

この会議の後に、定義を踏まえ、ねらいを達成するための特徴を読解のプロセスとしてまとめたのが、文部科学省が同年に示した「読解力向上プログラム（たたき台）」<sup>8)</sup>と考える。同プログラムでは、上記の4つの特徴を踏まえ、PISA型読解力を必要とする問題を解決していくプロセスとして、次の3つの観点を設定している。

①テキストの中の事実を切り取り、言語化・図式化する「情報の取り出し」

②書かれた情報から推論・比較して意味を理解する「テキストの解釈」

③書かれた情報を自らの知識や経験に位置づけて理解・評価（批判・仮定）する「熟考・評価」

○出題形式：約4割が自由記述

以上から、「読解力」とは、文章や資料から「情報を取り出す」ことに加えて、「解釈」「熟考・評価」「論述」することを含むものであると考えられる。このような授業改善やテストを行うことで、ねらいの達成に迫るPISA型読解力を身に付け、テキストを構造的に理解したり、矛盾や飛躍のない筋道を立てて表現したりする、いわゆる国語力の考える力（論理的思考力）が育成されることが考えられる。

## 4 国語力を身に付けるための方策について

### 1) 言語活動を通して育つ国語力

国語力を構成する分析力、論理構築力などを含む「論理的思考力」や相手の気持ちや文学作品の内容・表現、自然や人間に関する事実などを感じ取ったり、感動したりできる「情緒力」、経験していない事柄や現実には存在していない事柄などを自由に思い描いたり、相手の表情や態度

から言葉に表れていない言外の思いを察したりすることのできる「想像力」、考え、感じ、想像したことを表すために必要な「表現力」、そして、「国語の知識」、これらの国語力は、「聞く」「話す」「読む」「書く」という言語活動を、日常生活がそうであると同様に、有機的に組み合わせて指導していくことを通して、言葉の力として育てられると考える。(図2)

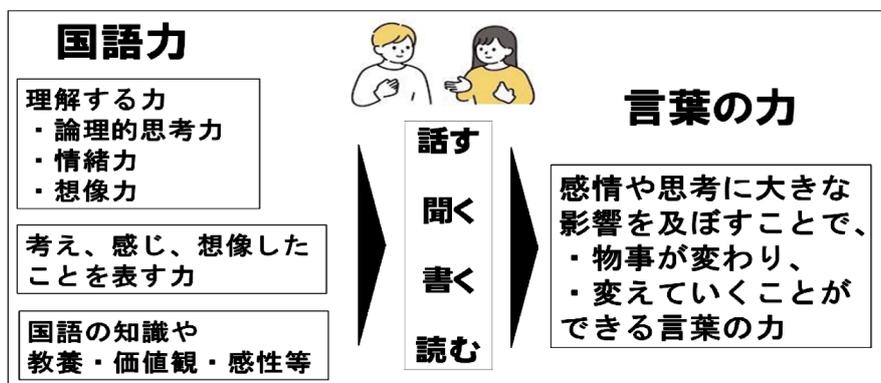


図2 【言語活動と国語力の関係】(筆者作成)

## 2) 子供の発達と国語力

国語力の効果的・効率的な向上のためには、乳幼児の時期から子供の発達段階を踏まえて、各発達段階でどのような国語教育を行うことが大切かを考える必要がある。そのためには、国語力を構成する「考える力」「感じる力」「想像する力」(以上、「理解する力」)、「表す力」、「国語の知識」について、脳科学の知見を参考にすることが有効だと考える。

基本的に、国語力はコミュニケーションを通じて育つことは自明である。コミュニケーションを行う際に活性化する脳の場所は、前頭前野と呼ばれる。前頭前野は、記憶や感情の制御、行動の抑制などさまざまな高度な精神活動を司っており、脳の最高中枢であると考えられている。

川島隆太氏は前頭前野の働きについて、自身の書籍「脳を育て、夢をかなえる」～脳の中の脳「前頭前野」のおどろくべき働きと、きたえ方<sup>9)</sup>において、次のように述べている。

- ① 言葉をつくりだす。
- ② 顔の表情や声の様子から、人の気持ちを推測する。
- ③ ものを覚えようという気持ちをつくりだす。「覚えるためには繰り返し練習しよう！」
- ④ 「さあ、がんばるぞ！」という意欲をつくりだす。
- ⑤ 「やってはいけないことはしない」という気持ちをつくりだす。言葉や暴力で傷つけてはいけない、盗んではいけない、など。
- ⑥ 悲しいことやくやしいことがあっても、人前では顔に出さずに我慢する気持ちをつくりだす。前頭前野がうまく働かないと、ちょっとしたことでも、すぐに怒ったり、めそめそしたりしてしまいます。
- ⑦ いろいろなものを発明する力も発揮します。発明や発見をする人はとても上手に前頭前野を使えるのです。音楽や絵画など、素晴らしい芸術作品を作りだす力も。
- ⑧ 周りのことを気にしないで、一つのことに打ち込む集中力も、反対に、2つ3つのことを、同時にできる力も前頭前野の働き。
- ⑨ 人とは違ったアイデアがたくさん浮かんでくるような人は、前頭前野をうまく使える人です。人の話を聞いたり、本を読んだりしたことをについて、自分の考えを持てる人、自分の意見をきちんと発表できる人、応用問題をすらすら解ける人、スポーツが上手な人・・・、みんなたくみに前頭前野を使っているのです。

これらの川島隆太氏の分析を参考に国語力との関係を考察する。前頭前野は学ぶ基盤となる意欲と共に、国語力を構成する「論理的思考力」や「情緒力」、「想像力」（以上、「理解する力」）や考え、感じ、想像したことを「表す力」との関係があることが分かる。

一方、国語力を構成する「国語の知識」の一つとして位置付けられている語彙力は脳の側頭葉と関係していると言われている。側頭葉は前頭前野と違って、早くから大人と同じような働きをするようになるので、語彙力の教育は乳幼児期から大人になるまで直線的に同じ調子で行ってよいと考えられている。

そこで、先に述べた文化審議会の答申「これからの時代に求められる国語力について」を踏まえ、「国語力を身に付けるための方策」について、国語力の向上に向けた国語教育の展開を次の3つの発達段階に分けて考えてみた。

### （1）3歳までの乳幼児期＜コミュニケーション重視期＞

前述の川島隆太氏によると、人間の脳は4、5歳までに大人の90%ができ上がり、生後から3歳ぐらいまでに前頭前野は急激に成長することから、この時期に前頭前野を活性化させることがとても重要であると言われている。そこで、前述した①から⑨の前頭前野の働きを活用して、次のような教育が有効だと考える。

①から⑥のかかわりで、言葉の意味が分からない、言葉を発することが難しいこの時期であっても、親から子への「語り」が大切である。そのような時期であっても、親がしっかり子供の目を見て話したり、語りかけたりすることを続けることで、親の穏やかな表情を見て、優しい声を聞き、子供は心の安定感を覚える。このような親子の関係が国語教育をはじめ、すべての教育の始まりである。

①から④のかかわりで、乳幼児の言葉の変化は、喃語をしゃべる1歳くらいまでの時期から、論理的思考力を働かせながら、一語文、二語文、三語文と3歳くらいまでに言葉を増やしていく。例えば、「わんわん」という一語文から手前に来てほしいという思いをつなげるために思考した二語文として「わんわん、おいで」となる。さらに、2歳を過ぎた頃から遊びたいという思いを発展的に加え「わんわん、おいで、あそぼ」と三語文を考え、つくりだすようになる。このことも前頭前野の働きで言葉をつくりだしたり、同時に、大人が使う言葉を真似たり、言葉の意味に興味をもち始めたりする時期でもある。

①から⑨の全てのかかわりで、この時期の「語り」や「読み聞かせ」はとても有効かつ効果的である。何故なら、前頭前野は言葉を覚えたり言葉に興味をもったりすることで、論理的思考力や情緒力、想像力の基盤になるからである。

また側頭葉との関係で言えば、この時期の「語り」や「読み聞かせ」によって、言葉を言語情報として視覚や聴覚に伝えていく働きは非常に大切である。コミュニケーションを通じて、乳幼児は視覚と聴覚を司る側頭葉を働かせながら、相手を親であることを認識して安心感の中で言葉を覚えていくことができる。

### （2）3歳から11・12歳（小学校高学年くらい）まで＜基礎作り期＞

この時期には、前頭前野の神経細胞には大きな変化はないが、側頭葉や頭頂葉などの神経細胞は成長を続けている。側頭葉は国語力を構成する「国語の知識」の一つとして位置付けられている語彙力と関係している。側頭葉は聴覚認知、言語の受容、視覚的な記憶、言語的な記憶、及び感情に不可欠という研究の知見がある。また、ある時期に急激な発達があるなど発達の波がなく、早くから大人と同じような働きをするようになるので、語彙力の教育は乳幼児期から大人になるまで直線的に同じ調子で行うことがよいと考えられている。

そこで、3歳から5歳にかけての幼児期では「読み聞かせ」や丁寧な「会話」、可能であれば「読書」などにより言葉の数を増やすことが可能である。この時期に、意図的に家庭や地域で様々な経験を積ませることで、言葉を介したコミュニケーションの楽しさやよさに気付かせたい。また、代名詞や助詞などを使ったり、「わたしは、ママの車に乗って、お買い物に行きたい」といったように、2つ以上の述語が組み合わさった複文を話したりすることができる時期でもある。このような成長の中で、「論理的思考力」や「情緒力」、「想像力」などの「理解する力」も身に付けることができると言われている。

小学校の時期では、幼児期の「話す・聞く」に加えて「読む・書く」ことによって国語力の基盤となる様々な「国語の知識」を身に付けることが重要である。そのためには、読書が特に重要である。読書をすることで「論理的思考力」や「情緒力」、「想像力」を働かせ、読解力を育むことができる。また、音読をすることで、視覚や聴覚から言葉が入り、側頭葉の活性化にもつながる。小学校低学年では、話す意欲が高まる時期でもあり、言葉で自己主張をし、自分の思いを相手に伝えて問題解決ができるようになってくる。このような発達を上手く学習に取り込み、低学年なりのグループ学習や朝夕の活動のスピーチを習慣化することも国語力を高める手法の一つである。

### (3) 13歳（中学生）以上＜発展期＞

思春期を迎えたこの時期から、個人差はあるものの前頭前野の神経細胞は再び急激な成長を始めると言われている。このことによって、これまでに培ってきた国語力の基礎を用いて、論理的思考力を働かせ、様々な言語情報の中から取捨選択して自分なりの考えを創り出したり、他者の意見を取り入れてあらたな自分の発見につなげたりしていく。このような活動を通して、一層、国語力を伸ばすことができる。

したがって、学校での国語科の学習以外においても、社会科や算数（数学）科、理科などの学習は国語教育として国語力の育成に有効であり重要であると言える。小学校学習指導要領（平成29年告示）解説「総則編」<sup>10)</sup>においても、次のように示されている。

(2) 第2の2の(1)に示す言語活動の育成を図るため、各学校において必要な言語活動を整えるとともに、国語科を要しつつ各教科等の特質に応じて、児童の言語活動を充実すること。あわせて、(7)に示すとおり読書活動を充実すること。

また、家庭での様々や社会体験を通して、論理的思考力の育成に努めることも重要である。人や社会と関わる様々な体験の中で、人の気持ちを察したり、寄り添ったりすることができる。このことはコミュニケーションを通して、「情緒力」や「想像力」等を育むのに有効である。また、中学生以降の青年期と呼ばれる発達時期には、脳の情報処理能力が飛躍的に伸びる時期でもあり、「論理的思考力」をはじめ、「情緒力」や「想像力」、「語彙力」等の総合的な発達を促していくとよい。その効果的な教育が3歳から11・12歳（小学校高学年くらい）までの＜基礎作り期＞でも述べた読書である。

### 3) 幼稚園教育において育みたい国語力～「聞く」「話す」活動から

国語力は子供の能動的な「聞く」「話す」「読む」「書く」という言語活動の中で育つ。能動的な言語活動になるためには、「面白い」や「やってみよう」「調べてみよう」という意欲を自分の中でつくり出せたとき、つまり心が動いたときに言葉の力を生むことができる。

附属幼稚園の年長の幼児に「浮く野菜（果実）と沈む野菜（果実）」というテーマで保育を行った。幼稚園教育要領解説<sup>11)</sup>では、第2節「4 言葉の獲得に関する領域」内容(2)の「したり、

見たり、聞いたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。」に当たる。実践の概要を以下、紹介する。

本実践で使用した野菜（果物）は、**図3**のとおりである。これらの野菜（果物）の浮き、沈みについて説明する。

結論は、地中で育つ野菜は沈む。野菜が地中のミネラルを多く吸収し、野菜自体が重くなる。したがって、地中で育つジャガイモ、ながイモは沈む。ピーマン、キュウリ、バナナ、リンゴ、キャベツは浮く。

- ・浮く野菜（果物）：ピーマン、キュウリ、バナナ、リンゴ、キャベツ
- ・沈む野菜（果物）：ジャガイモ、ながイモ

子供は、中が空洞で軽いという経験からピーマンやキュウリは浮くと直感するであろう。しかし、浮く野菜（果実）であるバナナやリンゴ、キャベツについては浮き沈みに迷い、沈む野菜であるジャガイモや細長いながイモについても、浮き沈みに迷う子供がいるであろうと考える。



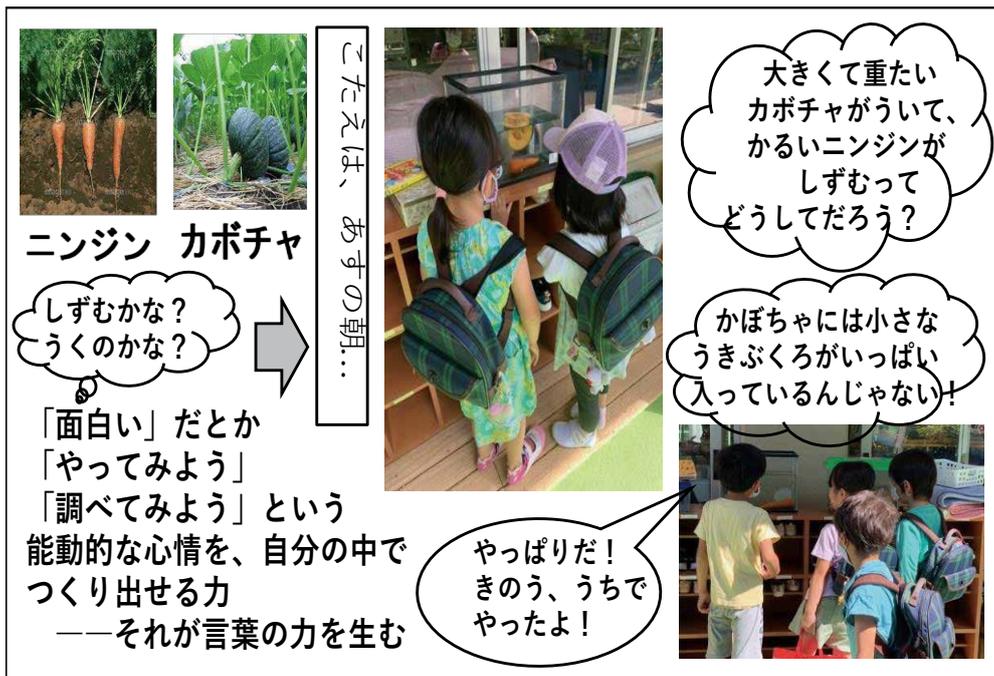
図3 【浮く野菜（果実）と沈む野菜（果実）の板書】

保育の実際では、ピーマンは「小さく軽い」から、子供は浮くと考えていた。キュウリやバナナも同様である。リンゴは「大きくて重い」から、子供は沈むと考えていた。大きいけれど果物だから浮くと「種別」で考える子供もいた。キャベツは「でっかくて重い」から、子供は沈むと考えていた。野菜だから浮くと「種別」で考える子供もいた。ジャガイモは「小さい」ので、浮くと全員が同じ考えであった。一方で、ながイモは沈む、浮くと考える子供が半々であった。

浮き、沈みの実験の中で、わたくしが水槽に入れる野菜（果物）を自分の予想と比べながら、目を大きく見開いて、その野菜（果物）の動きを凝視する様子が伺えた。そして、浮き、沈みの結果が自分の予想と同じであったときは「やっぱり」と喜びの声が上がり、自分の予想と異なっていたときは「えー、なんで？」や「どうして、沈んだの？」と疑問の声を発する。そのようなときは、「土の中の野菜は沈む」や「土になっている（土の中で育っている）野菜は沈む」、「葉っぱの野菜は沈む」など、子供なりの考えを表現する。すでに、子供は帰納的な思考で複数の事例から一般性を見出そうとしているのである。論理的な思考が働いていると言える。国語力を総動員した言葉の力を感じるところである。

実験の最後に、ニンジンとカボチャを提示し、浮き、沈みを予想した。ニンジン、カボチャと

もに浮き、沈みの予想があった。早く実験をしたいという子供の気持ちに反して、敢えて「答えは明日の朝、発表するよ」とすることで、子供に考える時間、家庭での実験の機会を与えた。翌日、**図4**のように登園したときに下駄箱の上に水槽を置き、答えを提示しておいた。「大きくて重たいカボチャが浮いて、軽いニンジンが沈むのはどうしてだろう？」とつぶやく子供がいた。それに対して、ある子供は「カボチャは小さな浮き袋がいっぱい入っているんじゃない」と話している姿があった。この表現にも、思考力や想像力を働かせた言葉の力を感じざるを得ない。また、「やっぱり！昨日、うちで実験したとおりだ！」と、明日を待ちきれずに家で実験をした子供も多くいた。



【図4 浮く野菜（果実）と沈む野菜（果実）】

幼児は、この実験のような心を動かされるような体験をしたとき、それを親や兄弟など親しい人に言葉で伝えたいくなる。心を動かされる体験には、この実験で特に自分の予想と異なった結果が出たときなど、自然の不思議さに触れたときや楽しい活動に参加したときなどの感動的な体験がある。他にも友達ともめたり、失敗したときに悔しい思いをしたりするなどの感情的な体験もある。このような体験の中で、共感してもらおうと喜びを感じるようになる。そして、自分の気持ちを表現する楽しさを味わうことができる。幼児は、自分の話を聞いてもらうことにより、自分も人の話をよく聞こうとする態度が育つ。人の話を聞き、自分の経験したことや考えたことを話す中で、相互に伝え合う喜びを味わうようになることが大切である。また、幼児が絵本を見たり、物語を聞いたりして楽しみ、言葉の楽しさに気付いたり、想像上の世界や未知の世界に出会い、様々な思いを巡らし、その思いなどを共有することで、国語力である情緒力や想像力が育つ。

#### 4) 育みたい国語力～「聞く」活動

国語力は子供の能動的な「聞く」「話す」「読む」「書く」という言語活動の中で育つ。能動的な言語活動になるためには、「面白い」や「聞いてみたい」「調べてみよう」という意欲を自分の中で作り出したとき、つまり心が動いたときに言葉の力を生むことができる。国語教育として、どのような話を聞かせるのか、どのような話で子供の心が動くのか、「論理的思考力」や「情緒力」、「想像力」を高め、心を豊かにする話が求められる。わたくしが子供や保護者へ話した一部を紹介する。

## (1) ディズニーランドのレストランでの話

わたくしは県教委から1年間(2010~2011)の社会体験研修の辞令を受け、周南市の会社で研修をさせていただいた。目的は会社経営を如何に学校経営に生かすことができるかを研修するためである。次の話は、当時の代表取締役社長(当時)が、社員に向けた社長講話である。

30歳前後の夫婦が、お昼にディズニーランドのレストランに入り、大人二人分の食事とお子様ランチを注文したそうです。店員さんは「お子様ランチは6歳以下のお子様に限られています」と、レストランのルール通りに対応しました。

すると、お子様ランチを注文した婦人は「今日は亡くなった子供の6歳の誕生日なのです。6歳になったらディズニーランドに行こうねと約束をしていたのです。それで、亡くなった子供のお子様ランチも注文させていただけないでしょうか…」と。その話を聞いて店員さんは、「少々お待ち下さい」と言って事務所に入って行きました。しばらくして、戻ってきて「こちらへどうぞ」と、夫婦を特別室へご案内をしたのです。ドアが開かれて夫婦はびっくりしました。

特別室のテーブルには夫婦二人の椅子とお料理が、そして、子供用の椅子までも準備され、テーブルには、なんとお子様ランチとお誕生日のケーキまでも置かれた食卓が用意してあったのです。夫婦は感激のあまり涙が止まらなかったそうです。

この話から、わたくしは学校経営者として、レストラン経営の判断の素晴らしさを学ぶことができた。その素晴らしさとは、マニュアル通りに物事を判断するのではなく、一人一人のお客様を大切に接遇をすることである。また、子供はレストランの思いやりのある行動に感動したであろう。

このようなことを趣旨に、全校朝会で校長講話を行った。学校だよりも載せ、保護者へも紹介した。子供も保護者も「感動して涙が出ました」という感想をいただいた。この感動は、子供や保護者の「情緒力」や「想像力」などの国語力の働きにより、話に込められた言葉の力を感じ取ることができたからである。この話に込められた心を動かす言葉の力を次のように考える。

「今日は亡くなった子供の6歳の誕生日なのです。6歳になったらディズニーランドに行こうねと約束をしていたのです。それで、亡くなった子供のお子様ランチも注文させていただけないでしょうか…」この婦人の言葉をレストランのマニュアル通りに判断するのではなく、夫婦の置かれている状況に思いを寄せることで、人の気持ちを察することのできる豊かな感性(情緒力)が育つ。

「特別室のテーブルには夫婦二人の椅子とお料理が、そして、子供用の椅子までも準備され、テーブルには、なんとお子様ランチとお誕生日のケーキまでも置かれた食卓が用意してあったのです。」という描写からは、情景を思い描き、如何にレストランが夫婦の気持ちを大切にしておもてなしをしたかイメージすること(想像力)ができる。

## (2) 面倒だから、しよう

ノートルダム清心女子大学の教授(当時)であった渡辺和子さんの著書に「面倒だから、しよう」がある<sup>12)</sup>。その著書の中で、大学の先生をしておられたときに出会ったある学生の話を紹介しておられる。その一節を紹介する。

テストの監督をしていた私は、一人の4年生が席を立ち上がったから、また何かを思い直して座る姿に気がきました。90分テストでしたが、60分経ったら、書き終えた人は退席してよいことになっていたのです。

座り直したこの学生は、やおらティッシュを取り出すと、自分の机の上の消しゴムのカスを集めて、ティッシュに収め、再び立ち上がって目礼をしてから教室を出て行きました。

私は教壇を降り、その人の答案に書かれた名前を確かめたように覚えています。ちょうどその頃（今もそうですが）、教えていた学生たちと、「面倒だから、しよう」という、ちょっとおかしい日本語を合言葉にしており、この4年生は、それを実行してくれたのでした。

著者の渡辺和子さんは、学生たちに『自分の怠け心と闘った時に、初めて本当の美しさ、自分らしさが生まれてくるのだと思う』と言っている。子供には自分の怠け心に是非チャレンジして、新たな自分の発見から自信につなげてほしいと思った。「ゴミは拾うのは面倒だ。面倒だから、拾おう」という姿に、グラウンドに落ちていたゴミを拾う大リーグの大谷選手の美しさにも重なった。

このようなことを趣旨に、年末の全校朝会で校長講話を行ったところ、翌年の新年の誓いを「面倒だから、しよう」にしたという子供もいた。学校だよりも載せ、保護者へも紹介した。保護者から「面倒だなどと思うときには、この言葉を思い出しています」という感想をいただいた。

この書名に込められた心を動かす言葉の力を次のように考える。

「面倒だから、〇〇〇」、この「面倒だから、」に続く言葉として、どんな言葉を想像するであろうか。多くの子供は順接的に考え、「だから」という言葉で、前件が後件の原因、理由となっているために「面倒だから、しない」や「面倒だから、やめよう」など、否定的な文末を想像する。しかし、「面倒だから、しよう」と肯定的な表現になると、論理的思考の逆を突く表現となるためにインパクトがある。子供に国語力としての「論理的思考力」が働くことで、「面倒だから、しよう」という言葉に心が動くのである。

## 5) 育みたい国語力～「聞く」「書く」活動

公益社団法人ACジャパンは、「企業が持てる資源を出し合い、社会にとって有益なメッセージを、広告という形で発信していこう」という志のもと、1971年に活動を始めた団体である。

ACジャパンは創設以来、「公共心」「思いやり」「助け合いの心」を大切に考え、メッセージを発信している。こうした人間として根源的な価値観は不変であり、今の時代にはより一層重要性を増している。この普遍的価値を大切にしながら、地球環境、家庭教育、防災、ネットモラルなどの社会課題に真摯に向き合い、未来の解決につながるよう、メッセージを発信し、人々の心に働きかけてきた団体である。（ホームページの理事長挨拶より引用<sup>13)</sup>）

心に働きかけるためには言葉の力も大切であるが、映像で訴えることで、よりメッセージを強く伝えることができる。映像の中にも心が動くような言葉の力がある。ACジャパンの広告を全校朝会で子供に視聴させて、テーマについて考えさせたことがある。全校朝会での校長講話は、各学級担任より各学年の発達に相応しい内容に変換され、子供の発達に応じた「論理的思考力」や「情緒力」、「想像力」を働かせることで、講話の趣旨をしっかりと理解できるようにしている。以下、ACジャパンの広告の一つを紹介する。

### (1) 見える気持ちに<sup>14)</sup>

全校朝会の校長講話で使用した広告「見える気持ちに」を紹介する。詩人で作詞家の宮澤章二さんが作った「行為の意味」<sup>15)</sup>という詩の抜粋である。著作権の関係から動画や写真を本稿の中

で貼り付けることはしないが、台詞だけでも紹介したい。

『心』は誰にも見えないけれど、「ころづかい」は見える。『思い』は見えないけれど、『思いやり』は誰にでも見える。その気持ちをカタチに。

広告の動画は、電車で高齢者に気をかける「ころ」はあっても、実際に席を譲る行為で「ころづかい」は伝わる。また、階段を登る高齢者を心配する「思い」はあっても、実際に声を掛け、手助けをするなどの行為で「思いやり」は伝わる。図5のように、広告は展開する。

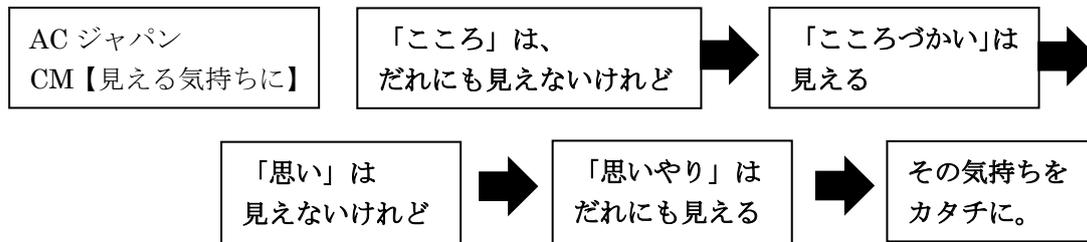


図5 【「見える気持ちに」の展開】

「ころ」と「ころづかい」、「思い」と「思いやり」という言葉の意味の違いを上手く使い分けたり、対句的な技法を使ったりするなど表現の工夫や修辞法（国語の知識）を用いて、言葉の力をしっかり発揮させている。また、言葉の力をしっかり感じ取ることができる。

東日本大震災以降、ほとんど毎日、テレビでACジャパンのCMで流れていた。画面、画面で映像と共に映し出される言葉は、とても重みのある洗練された素晴らしい言葉である。被害に遭われ、大変な悲しみを抱え、厳しい避難所生活を強いられている多くの皆さんへの「思い」を、わたくしたち一人一人がしっかりと胸に刻むとともに、その「思い」をしっかりと行動に表していくことが大切なのだということを教えてくれる。

小学校の子供はGIGAスクール構想によって一人一台の端末を所有し、学校でも使う機会が多い。家庭へも持ち帰り、その使い方に慣れてきている。そのような中で、総合的な学習の時間を活用して、「優しさ」をテーマに、「論的思考力」や「想像力」を働かせて、映像と言葉、音声等を組み合わせる作品を作る学習を構想することも面白い。一例として、「見える気持ちに」を視聴させ、7画面以内で2分間以内等の条件を設定して、投票によって優勝を決め、給食時間の校内放送で映像を流す。子供はきっと意欲的に作品製作に取り組むことが予想される。このような活動を通して、「聞く」「書く」活動を通して、国語力を育てていくことができる。

## 5 気になる言葉～普段の生活における言葉遣いから

「理解する力（論理的思考力、情緒力、想像力）」や「表す力」が働くときの基盤をなす「国語の知識」は、基本的には読書などを通じて生涯にわたって形成されていくものである。しかし、普段の生活の中の言語環境が大いに影響するといっても過言ではない。例えば、言葉遣いや文体などの表現に関する知識について考えてみたい。

### (1) 「～になります」の例から

喫茶店に入ると、「こちらが、メニューになります」と言ってメニューを差し出される。そして、モンブランのケーキセットを注文すると、しばらくして「お待たせしました。モンブランのケーキセットになります」と言って、ケーキセットが出てくる。喫茶店を出るときには、「お会計は648円になります」と言われる。この「～になります」という言葉遣いに違和感を覚えるのは、わたくしだけであろうか。

「～になります」は、「～なる」を丁寧に表示した言い方なので、一概に間違っているとは言い切

れないであろう。しかし、本来の「～なる」の意味は、「わたくしは、20歳になる」のように、変化してある状態になる、到達することを意味したり、「彼は、従兄弟になる」のように、ある立場に当たることを意味したりする。

従って、「こちらが、メニューになります」を改めて考えてみれば、「こちらが、メニューです」の「です」が当てはまり、より丁寧になれば「～でございます」を使い、「こちらが、メニューでございます」とした方が違和感をもたれることなく、より自然な表現になると考える。「モンブランのケーキセットになります」や「お会計は、648円になります」も同様で、「モンブランのケーキセットでございます」や「お会計は、648円でございます」がよいと考える。

## (2) 「～の方」の例から

普段の生活の中、「～の方」もよく耳にする。例えば、ホテルにチェックインした時には「お荷物の方、お持ちしましょうか」を言われ、食事の時は「お料理の方、お持ちしました」、そしてチェックアウトの時には「お会計の方は、お済みとなっております」という具合に、「～の方」だらけである。広辞苑<sup>16)</sup>を参考にまとめると、「の」を加えて「～の方」とした場合の『方』の意味は次による。

- ① 向き。かた。「東の一に煙があがる」
- ② ある地域やある部面。
- ③ 話題のものをぼやかして、その部面であることという話。「設計の一をやっている」
- ④ 並べて幾つか考えられるものの一つ。「酒より菓子の一がいい」
- ⑤ どちらかといえばこれだという部類をいう語。「勇氣ある一だ」

以上から「～の方」の意味をまとめると、曖昧にしたい方向や方面、分野で使ったり、比較し選択したりする場合に使うと言える。また、日本人の奥ゆかしさから慎み深い表現として「～の方」を使う場合もあるようだが、決して敬語ではない。例として挙げた文章では、「お荷物の方、お持ちしましょうか」については、荷物だけについて言っているのであれば、何も曖昧にすることなく「お荷物をお持ちしましょうか」でよい。「お料理の方、お持ちしました」については、コーヒーとカレーを注文したのであれば「コーヒーの方は、後でお持ちしましょうか」という表現もあるが、比較する対象がないので「お料理をお持ちしましょうか」と尋ねればよい。「お会計の方は、お済みとなっております」については、金銭に関わることなので曖昧な表現は避けるべきである。「お会計は、お済みになっています」でよい。

「～の方」を曖昧にしたい方向や分野で使ったり、比較し選択したりする場合に使うという考え方から、次のような使い方がある。例えば、「(道を聞かれた場合に) まっすぐ、北の方に進んでください」と曖昧な方向を示したり、「(病後に) 体調の方はいかがですか」「(宴会場面で) お酒の方は、大丈夫ですか」など、プライベートなことで曖昧にしておきたいことを聞いたりする場合に使う。また、「A案より、B案の方に賛成します」は比較し選択する場合の使い方である。

## 6 まとめ～言葉の力～

21世紀は新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ、社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。そのような社会で必要とされる生きる力などの能力は、コミュニケーションの中での問題解決的な学びやPBL (Project Based Learning)などの主体的・対話的で深い学びを通じて育成されると考える。

一方で、第4次産業革命とも言われる変化の一つとしての人工知能 (AI) の発展により、労働力に削減や生産性の向上が期待されている。しかし、これからの社会が全て人工知能 (AI) によ

て支配されるわけではない。人工知能（AI）にできないことは、コミュニケーションを通じた相互理解の中での「言語理解」である。言語を理解するためには単語の意味だけでなく、これまで述べてきたように、言葉として使われている背景や文脈の理解も必要になるため、その全てを人工知能（AI）に理解させることは難しい。

このように考えると、今後、人間が人工知能（AI）に勝るとすればコミュニケーション分野にあると考える。人間は感性を豊かに働かせ、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかということ、コミュニケーションを通して明確にして言葉で表現することができる。そのために必要な国語力を育てていくことが大切である。それが、人間の学習である。

子供は友達とのコミュニケーションや協働的な学習を通して、予測できない社会の変化に受け身で対処するのではなく、主体的に関わり合い、様々な力を発揮し、生きる基盤となる国語力を身に付けていく。言葉を発する方も受け止める方も、国語力を身に付けることで言葉の力を実感することができる。

そのための学校における国語教育をはじめ、特に国語科教育では、「論理的思考力」や「情緒力」、「国語の知識」の育成を重視していくことが必要であると考え。「論理的思考力」の育成は、国語科が大きな役割を担っている。日常生活の論理は言葉の論理とも言えるので、言語を通して身に付けるのが最も効果的であると考え。具体的には、文章を書くことの指導や自分の考えや意見を述べる機会を多く設けることなどにより、「論理的思考力」を高めていくことができる。「情緒力」を身に付けるためには、幼児期から「聞く」ことを重視し、小学校での国語科の授業の中で文学作品を中心とした「読む」ことの授業を意図的・継続的に組み立てていくことが大切である。さらに、「国語力」の基盤となる「国語の知識」を身に付けるためには、漢字をはじめ各学年で必要とされる力を確実に指導していくことが大切である。

「美しい言葉」や「力強い言葉」とよく聞かすが、ある言葉だけで「美しい」や「力強い」と決まっている言葉はない。ある人があるときに発した言葉がどんなに美しい言葉であったとしても力強さを感じても、別の人がその言葉を用いたときに、同じように美しい、力強いとは限らない。何故なら、言葉は単独で意味をもつのではなく、前後の文脈やその言葉を発している人の背後にある経験や状況の中で使われているからである。たとえ幼子が発した言葉でも、感動したり心に強く影響を受けたりすることがある。それは、前後の文脈の中で、その子の人生を背後にした魂のこもった言葉だからである。だから、言葉の力を実感するのである。次のような話が、ある教科書<sup>17)</sup>に掲載されている。

とても美しい桜色に染まった糸で織った着物を見て、「この色は何から取り出したのか」と聞くと、染織家は「桜からです」と答えた。桜の花びらを煮詰めて色を取り出したものだろうと思った。しかし、実際は桜の木の皮からこの美しいピンクの色が取れるという。しかも、一年中どの時期に取れるわけでもない。桜の花が咲く直前に取り出すことで、えも言われぬ色を取り出せるという。とても美しい桜の花びらの桜色は、開花直前の樹皮や樹液からの桜色なのである。桜の木が、全身全霊で美しい桜色を木の先だけに醸し出している。

一つ一つの言葉もまた然りである。桜の花びらの一枚一枚に似ている。言葉に美しさや力強さを感じるのは、言葉を発する人の背後にある経験や状況の中で絞り出されたものだからである。その言葉を受け取る者は、そこに言葉の力があるから、その言葉から人の生き様を想像したり、生き方の意味を考えたりすることができる。だから、わたくしたちは常に言葉を意識して普段の生活の中でも、国語科という教科の枠を超えた「国語教育」を社会でも家庭でも大切にしたいものである。

## <参考・引用文献>

- 1) 文化庁 令和3年度「国語に関する世論調査」の結果について  
[https://www.mext.go.jp/content/20221221-mxt\\_syoto01-000026652\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20221221-mxt_syoto01-000026652_3.pdf) (2025.1.30)
- 2) 文化庁「これからの時代に求められる国語力について」(文化審議会答申) 平成16年。
- 3) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成20年告示)解説 国語編」東洋館出版社
- 4) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編」東洋館出版社
- 5) 同上 p.6
- 6) OECD生徒の学習到達度調査PISA2022のポイント  
文部科学省・国立教育政策研究所 令和5年12月5日  
[https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2022/01\\_point\\_2.pdf](https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2022/01_point_2.pdf) (2025.1.30)
- 7) 平成16年度 臨時全国都道府県・指定都市教育委員会・指導主事会議資料  
「PISA(読解力)の結果分析と改善の方向(要旨)」平成17年1月  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gakuryoku/siryu/1379647.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryu/1379647.htm) (2025.1.30)
- 8) 読解力向上プログラム(たたき台) 文部科学大臣 平成17年  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/031/shiryu/05120201/007.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/031/shiryu/05120201/007.htm) (2025.1.30)
- 9) 「脳を育て、夢をかなえる」～脳の中の脳「前頭前野」のおどろくべき働きと、きたえ方～  
東北大学教授 医学博士 川島隆太 くもん出版 2003
- 10) 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編」東洋館出版社 p.80
- 11) 文部科学省「幼稚園教育要領(平成30年告示)解説」フレーベル館
- 12) 「面倒だから、しょう」 渡辺和子 幻冬舎 2017
- 13) 公益社団法人ACジャパン ホームページ <https://www.ad-c.or.jp/> (2025.1.30)
- 14) 広告「見える気持ちに」 <https://www.youtube.com/watch?v=fkEdeBFMEHM> (2025.1.30)
- 15) 「行為の意味」～青春前期のきみたちに～ 宮澤章二 ごま書房新社 2010  
行為の意味 宮澤章二  
あなたの心はどんな形ですかと 人に聞かれても答えようがない  
自分にも 他人にも心は見えない けれどほんとうに見えないのであろうか  
確かに心はだれにも見えないけれど 心づかいは見えるのだ  
それは 人に対する積極的な行為だから  
同じように胸の中の思いは見えないけれど 思いやりは見えるのだ  
それは 人に対する積極的な行為だから  
あたたかい心が あたたかい行為になり やさしい思いが やさしい行為になるとき  
「心」も「思い」も 初めて美しく生きる それは 人が人として生きることだ
- 16) 広辞苑(第7版) 岩波書店 2018年
- 17) 光村図書 中学2年 国語 「言葉の力」